

よこはま

の

まなびば



文化芸術の社会教育としての役割を
捉え直すプロジェクト



ごあいさつ

STスポット横浜では、文化芸術の社会教育としての役割を捉え直す「よこはまのまなびば」というプロジェクトを行いました。

「第32期横浜市社会教育委員会議提言－本市における社会参加のすそ野の拡大について－」（令和2年11月、第32期横浜市社会教育委員会議）のなかでは、社会参加を「市民が地域・社会の様々な活動に加わり、地域・社会の一員であるという気持ちを持つこと」と定義されています。社会参加が促されることによって、社会参画につながり、さまざまな課題などに対応する市民活動に発展されることが期待されています。また、社会参加における前提として、「生活圏域で、楽しく行う社会参加」が挙げられています。文化芸術の特徴のひとつである、さまざまな背景を持つ人たちと楽しみながらともに活動を行うことは、まさに「楽しく行う社会参加」につながるのではないのでしょうか。

今回は【障害のある人たちとの取り組み】【外国にルーツのある人たちとの取り組み】の2つをテーマとして、地域の人が混ざり合い、ともに活動する機会を設けました。背景や属性を尊重しながら、その上で、枠組みを超えて新しい価値を生み出す可能性を感じました。この2つの実践においては、自ら学ぶこと、相互に学ぶこと、さまざまな学びのかたちが見受けられました。社会教育の専門家のみなさんとの対話を行うことで、文化芸術を介した学びについても議論を深めていきました。

これからの地域における文化芸術を考える上で、みなさんの活動の参考になれば幸いです。

◀ 目次 ▶

02 STスポット横浜について

—— 実践報告

04 からだであそぼう、からだをあそぼう in にはる
(障害のある人たちとの実践)

06 着物服を着て モデルになってみよう!
(外国にルーツのある人たちとの実践)

—— 社会教育と文化芸術の接点を探る

09 ひとりひとりから始まる学びのかたち
(NPO法人フュージョンコムかながわ 理事長 成田裕子さん)

10 仲間と関わりあう、学びのかたち
(相模女子大学人間心理学科准教授 狩野晴子さん)

11 自分たちで学びをつくり続けていく
(「子ども白書」編集委員長 森本扶さん)

認定NPO法人STスポット横浜について

STスポット横浜は、「アートを持つ力を現代社会に活かし、より豊かな市民社会を創出する」ことを目的とし、文化芸術分野の中間支援組織として、以下の事業を展開しています。それぞれの事業の詳細については、ウェブサイトをご覧ください。

▶ 小劇場・STスポットの運営

STSpot
Yokohama



▶ 学校と文化施設や芸術団体をつなぐ教育事業
(横浜市芸術文化教育プラットフォーム)

アーティストが学校へ
横浜市芸術文化教育プラットフォーム



▶ 地域文化をサポートする地域事業
(横浜市地域文化サポート事業・ヨコハマアートサイト)

ヨコハマ
アートサイト
Yokohama Art Site



▶ 障害福祉と文化芸術の関わりを考える福祉事業
(神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター)



実践報告

障害のある人たちとの実践、外国にルーツのある人たちとの実践の2つをご紹介します。対象となる人たちだけでなく、地域の人たちやテーマに関心のある人たちも参加する場となりました。パートナー団体のみなさんと協働し、学びを深めながら活動を行いました。

からだであそぼう、からだをあそぼう in にいはる



医療的ケアが必要な子どもたちとその保護者のみなさんが、地域の中で安心して楽しめる時間を過ごせたらと考え、レスパイト・ケアサービス萌のみなさんと一緒に、企画しました。誰もが持っている自分だけのからだを使って、にいはる里山交流センターの芝生や緑、空気を感じながら開放的な雰囲気を楽しみました。

▶ 内容

午前と午後の2回、1時間ずつ開催しました。まずは、参加しているみなさんの自己紹介からスタートです。名前だけでなく、からだでもご挨拶。岡田さんと山下さんが一人ひとりに近づいて、視線をあわせたり、そっとからだに触れたり、距離を縮めていきます。そのあとは、外に出て、ぐるっとお散歩。見つけたものに反応したり、芝生に降りたり、思い思いの時間を過ごしました。午後の回では、手をつなぎ、輪になって波を感じたり、ウクレレやタンバリンで小さなセッションが起きていたりしました。ふらっと会場に来た近所の子どもたちやスタッフの家族なども混ざり、無理のないかたちで障害のあるなしに関わらず、一緒に過ごすことができた時間でした。

日にち：2022年10月23日(日)

時間：11:00~12:00、13:00~14:00

参加者：午前21名、午後14名

アーティスト：岡田智代(ダンサー)

アシスタント：山下彩子(ダンサー)

パートナー団体：NPO法人レスパイト・ケアサービス萌

会場：にいはる里山交流センター(横浜市緑区新治町887)



ひとりひとりとご挨拶



芝生で寝転がってみる



それぞれのセッション

▶ 実施を終えて

からだひとつでただそこにいること、今回の取り組みはそのことをその場にいる人たちで確かめていくような時間でした。何かをしてもいいし、しなくてもいい。ささやかな選択をひとりひとりが行う、そんな時間でした。医療的ケアの必要な子どもたち、保護者のみなさんにとって、ふだんから感じている行動の制限や外出時の緊張感はコロナ禍でより大きくなっていったように思います。顔見知りの萌のみなさんがいること、バリアフリーの状況があること、屋外という環境、何をしても／しなくてもいい雰囲気、それが安心へとつながりました。

アーティストの岡田さん、パートナー団体のレスパイト・ケアサービス萌のみなさん、企画者である私たちSTスポット横浜で行う、初めての協働でした。それぞれが得意なところを最大限活かし、難しいところは信頼しておまかせしながら、一緒に未知のことに挑戦できたことが、大きな学びとなりました。これからも領域を越えて、お互いの知恵を持ち寄りながら学び合える土壌を作り続けていきたいと思っています。



思い思いの時を過ごす

プロフィール

岡田智代 (おかだ・ともよ/ダンサー)

1956年生まれ。ダンサー。結婚後三児の母になった後、再び踊り始める。ソロ活動の他に国内外振付家作品に出演。近年は演劇や美術のパフォーマンスにも活動の幅を広げている。2021年より山下彩子と日常から緩やかに繋がるダンスユニット『テゾルモヅル』を始動。中高年対象のストレッチクラスや、支援学校でもワークショップを行う。ヨガインストラクター、アムリタ智代。地唄舞、桐崎鶴丸。静謐な時間と炸裂するエネルギーを併せ持ち、ダンスと日常の境界線上を往き来する。

<https://odorum.net/>

NPO法人レスパイト・ケアサービス萌

「レスパイト」とは「休息・息抜き」という意味です。「ご家族のほっとひと息をお手伝いします」を合言葉に、障がい児や医療的ケア児の在宅生活のQOL(Quality Of Life)向上を願い、訪問看護や障害福祉サービスなどの公的サービスを活用しながら在宅レスパイト活動を行っています。1995年の設立以来、利用者のみなさん、ご家族のみなさんとスタッフとのつながりを大切にしてきました。萌に関わるみなさんが大きな一つの家族というイメージを持って、これからも歩んでいきたいと思っています。

<https://npo-respitemoie.houmon.shafuku.com/>



大きな輪をつくる

着物服を着てモデルになってみよう！



横浜に住む外国にルーツのある人と日本人がともに自身の文化やからだ向き合い、表現活動を行う場をつくれたらと、なか国際交流ラウンジのみなさんと一緒に、企画しました。思い思いにアレンジしたオリジナルの着物服を身に纏うと、別人になった気分でポーズ。笑い声に溢れた会場で、それぞれが自分の新しい一面を発見していたようでした。

▶ 内容

まずは伊東さんの着物服のお話からはじまりました。着物服とは、着なくなった着物をほどいて洋服のデザインにアップサイクルしたものです。会場には、着物服と着物をほどいた反物が並び、参加者は好きな着物服や反物を選んで着てみます。最初はどう着ればいいのか戸惑う様子もありましたが、腰に巻く、肩からかけるなどいろいろと試しながら、それぞれお気に入りの着方を見つけていきました。オリジナル衣装が完成するとスマートフォンで記念撮影。音楽や照明が入り、ノリノリで撮影会が進みます。最後に撮影した画像をスクリーンに投影し鑑賞会。初めて会った人同士で着せあったり、撮影しあったりと新しい出会いも生まれていました。

日にち：2022年12月17日(土)

時間：11:00~12:45

参加者：15名

アーティスト：伊東純子(デザイナー)
砂山典子(ダンサー、パフォーマンスアーティスト)

アシスタント：丹羽梓

パートナー団体：なか国際交流ラウンジ

会場：なか国際交流ラウンジ 研修室1
(第10回中区多文化フェスタ会場)



着物服についてのレクチャー



気になる着物服を選んでみる



2人1組で思い思いに着せあってみる

▶ 実施を終えて

なか国際交流ラウンジさんのご協力で、10～50代の幅広い年齢層の外国にルーツをもつ方々に多く参加してもらうことができました。「国籍も年齢層も、いつものほどこや縫うなどのワークショップとは全く違ってとても新鮮でした。着物服を着たり撮影をしたりしている間、いろいろな所から笑い声が聞こえたので、楽しんでもらえたのかなと思っています」と伊東さんは振り返ります。また、砂山さんは「ダンスワークショップでもそうですが、2人1組で考えてもらうと進みます。特に初対面のペアは緊張感の中で一生懸命作ろうとします。今回は、ペアで作らないと着付けができないこともあり、2人1組で進めたことで楽しいムードになったと思います」と活動について振り返ります。参加者の方からは「写真撮影が楽しかった」「さまざまな人と交流しながら新しいものを作ることが楽しかった」という感想がありました。今回は表現活動を通して新しい人との出会いや交流が生まれたことが大きな成果でした。今後も文化芸術をきっかけに人と人の輪が広がっていくような活動を続けていきたいと思っています。



着方を試す



ポーズを取って撮影

プロフィール

伊東純子 (いとう・じゅんこ/デザイナー)

東京生まれ。横浜在住。多摩美術大学絵画科油画専攻、文化服装学院服飾専攻科技術専攻卒業。2009オリジナルブランド「un:ten」(アンテン)を立ち上げる。現在、横浜・日ノ出町のアトリエにて、着物服や衣装制作、my sewing room (個別洋裁レッスン)などを行なっている。

<https://un-ten.com/>

砂山典子 (すなやま・のりこ/ダンサー、パフォーマンスアーティスト)

80年代黒沢美香&ダンサーズ、90年からアーティストコレクティブdumb typeのメンバーとして2020年までの全てのパフォーマンス作品に参加。ソロ活動でもジャンル横断的に国内外のアーティストとコラボレーション多数。SNATCH名義で、キャバレーイベントやミュージシャンとのセッション多数。パフォーマンスで訪れた国は30カ国以上。

なか国際交流ラウンジ

外国人住民への生活情報提供、相談を多言語で実施するとともに、日本語教室の開催、地域多文化共生推進のための通訳ボランティアの派遣、外国につながる子ども・若者の人材育成などを行う、外国人住民と地域をつなぐ多文化共生の拠点です。異なる文化や生活習慣への理解を深める交流の拠点として、さまざまな交流事業を実施しています。

<https://nakalounge.jp/>

社会教育と文化芸術の 接点を探る



社会教育の場をつくり続けているみなさんにお話を伺い、文化芸術との接点を探りました。文化芸術を介した学びはどのような可能性があるのか、みなさんのこれまでの経験をお話いただきながら、考えを深めていきました。

ひとりひとりから始まる学びのかたち

日時 2022年12月5日(月)10:00~11:00

方法 オンライン会議システム Zoom を使用

お話をうかがった方 成田 裕子さん (NPO法人フュージョンコムかながわ 理事長)

その人らしく生きる支援を届けたい

「フュージョンコムかながわ」は、神奈川県肢体不自由児協会を前身とするNPO法人で、2009年に設立されました。重度障害や病気のために在宅ケアを必要とする方は、外出や通所施設を利用することが難しく、療育や特別支援学校(訪問教育)を卒業した後は、学習の機会が途絶えてしまうのが現状です。そうした状況を打開するため、同法人では、在宅ケアを必要とする18歳以上の方の自宅を学習支援員が訪問し、生涯学習を支援する訪問サービス事業「訪問カレッジEnjoyかながわ」(以下、訪問カレッジ)を立ち上げ、その人らしく生きる支援を行っています。今回は理事長の成田さんに、支援の体制や芸術文化に対する捉え方について、お話を伺いました。

大学との連携

訪問カレッジの学習支援員は、教員を退職された方が中心となって構成されており、各カレッジ生の状況にあわせ、様々な学び方を織り交ぜて運営しています。ま

た、大学と連携することにより、教員をめざす大学生を受け入れ、一緒に同行訪問を行っています。大学生にとって、カレッジ生やそのご家族と接する機会は将来の財産となり、またカレッジ生にとっても、同世代と関わりを持つことは貴重な機会となっています。

文化芸術の力を福祉の現場に

「音楽や美術は感性に訴えるものがあり、力がある。」と話す成田さん。近年は動画配信サービスやSNSが発達し、気軽に作品を鑑賞できるようになりましたが、芸術家が創り出すものに直で触れること、その場の雰囲気や感動を共有する体験が、重度障害のあるカレッジ生にもとても重要だと考えているそうです。成田さんは、今後継続して事業展開していく上での課題のひとつとして、「地域・社会教育資源との連携」をあげています。芸術家をゲストティーチャーとして訪問カレッジに招き、カレッジ生が文化芸術に触れる機会を作って行きたいとお話いただきました。

プロフィール

成田裕子 (なりた・ゆうこ)

富山県・神奈川県の特設支援学校の教員・管理職を経て現職。みんなが地域に溶け込んで当たり前の生活をするを目的に、障害者の社会参加事業やスタッフの研修事業に取り組む。加えて、教員時代に気がかりだった「みんなのトイレ」に大人用ベッド設置の署名活動や、障害の重い方の学校卒業後の多様な学びの場として生涯教育の訪問サービス事業「訪問カレッジEnjoyかながわ」を立ち上げ、活動している。



仲間と関わりあう、学びのかたち

日時 2022年12月7日(水)16:00~17:00

方法 オンライン会議システムZoomを使用

お話をうかがった方 狩野 晴子さん(相模女子大学人間社会学部人間心理学科准教授)

ともに学べる共生社会をめざす 「インクルーシブ・プログラム開発事業」

相模女子大学では、令和2年度より、相模原市（市発達障害支援センター）との連携・協働による、発達障害や知的障害のある若者を対象とした生涯学習プログラム「インクルーシブ・プログラム」の開発を行っています。今回は、相模女子大学人間心理学科准教授の狩野晴子さんに、プログラムの概要や、大学の場を活用した事業展開についてお話を伺いました。

学びをとおして、お互いを知る

「インクルーシブ・プログラム」では、発達障害や知的障害のある若者が生涯を通じて学び、余暇を楽しむことができる環境づくりの研究として、「①リサーチ」「②セミナー」「③ゼミ」の3つの学習プログラムを実施しています。

そのなかで、狩野さんは「①リサーチ」を担当してきました。このプログラムは、参加者自らが興味関心のある事柄についての調査を行うというもので、令和3年度は「障害のある人が学びたくなる大学ってどんな大学？」を

テーマとしました。障害のある人・学生・大学教員・市職員がともに調査研究を行い、報告会を実施することで、社会に向けて調査結果を発信していきます。最初は、障害のある人に対してどのように接したらよいか分からず緊張していた学生たちも、回を重ねるごとに打ち解け、調査をとおして考え方や想いを共有し、お互いを理解することにつながっていききました。

さまざまな社会資源と連携していく

学びたいと考えている障害のある人の「潜在的なニーズはすごくあると思う」と狩野さんは話します。講義をとおして障害のある人と市民との交流を促す「②セミナー」では、参加者が興味関心のありそうな科目を組み、講師を選出しています。心理学の講義では、「心理学と音楽」をテーマにするなど、文化芸術の分野にも触れながら開催してきました。現在すでに協働している福祉関係団体に加え、文化芸術機関など、相模原市内の様々な社会資源と連携してプログラムを実施していくことで、「参加者の生活がより豊かなものになっていくのではないかと今後の展望を交えてお話しいただきました。

プロフィール

狩野晴子(かのう・はるこ)

大学卒業後、知的障害児入所施設に勤務するが、厳しい現実と自らの無力さに打ちのめされ学び直しを決意。大学院ではセルフ・アドボカシー(障害者自身による権利擁護)とエンパワーメント(障害者自身が力をつけるための支援)をテーマに研究を行い、修了後は再び福祉現場へ。ガイドヘルパー派遣事業所を立ち上げ知的障害者の地域生活の支援に関わる。2006年からは人材育成と研究活動にシフトし、現在は大学にてソーシャルワーカー養成に携わっている。



自分たちで学びをつくり続けていく

日時 2022年12月13日(火)14:30~16:00

方法 オンライン会議システム Zoom を使用

お話をうかがった方 森本 扶さん(「子ども白書」編集委員長)

聞き手 小川 智紀、田中 真実 (STスポット横浜)

「子ども白書」編集委員長の森本扶さんとともに、「よこはまのまなびば」の取り組みを振り返りながら、文化芸術の社会教育としての役割や、関係性についてお話しいただきました。

本来の学びのかたちとは

森本: 学びというのは、枠組みをあまり固執しないで、双方向の中で学びをデザインしていく必要があると思っています。「よこはまのまなびば」においてもそのような瞬間がたくさん生まれていたのではないのでしょうか。

田中: 今回のワークショップでは、【障害のある人たち】、【外国にルーツのある人たち】と大きく2つのテーマを設定して企画しました。あわせて、その人たちにむけてだけ行うのではなく、支援者のみなさん、地域にいる人たち、関心を寄せている人たちにまで届けるのにはどうしたらよいかも考えました。パートナー団体のみなさんも一緒になって考えてくれたのは心強かったです。

森本: 社会教育は、教育ありきではなくて、学習ありきなんです。学習者、支援者などの枠組みもなるべく取っ払っていくのが理想です。学習者の成長発達、生き方を応援する、よく能動的主体なんていいますが、簡単にいえば、「その気になる」ってことですよ。その気になって、外部のさまざまな情報などを自分自身で選び取りながら、自らを作り変えていく。そして、自分をより良く更新していきたいと思えるようなサポートをするの



が社会教育の取り組みです。そういう創発性のようなものをなるべくたくさん起こせるような環境を醸成する。環境醸成といたりもします。その人の内面を枠組みで紹介するのではなく、自分でつくり続けていく、変わり続けていくということを、その気になってできるようにサポートするのが社会教育なんです。そのときに、この「よこはまのまなびば」はまさにそういう力学が出てきていると感じました。

取り組みから考える、自治

小川: 振り返りをするときに、よく自治という言葉が浮かびます。自分たちで何かつくっていくこと。専門性が大事だと思われていますが、それ以上に勝手にやる、その気になるほうが大事なかもしれない。制度を運用するのも重要だけど、自分たちでつくり上げていくやり方も、地域での活動の可能性としてあるのではないかと思います。ということも確認できました。

森本：一部の人を権力化しないというか、多元化するというのでしょうか。そのあたりが大事ですよね。どのような問題意識がありますか。

田中：ふだんからいろんなことに縛られている感覚があります。自分たちが学び、何か出来事を起こしていく力が、この社会を生きていくために必要だと感じています。私たち自身もそうだし、子どもたちや障害のある人たちもそうだし、あらゆる人にとって、自分たちで決めて考える手立てを持たなくてはならない割には、その術を意外と持っていないのではないかとこのところに問題意識があります。

森本：自治というのは、自分たちで学びをデザインしていくということでもあると思います。近代社会においては、効率性、合理性が重視されます。そこから社会的排除につながることもあります。そういった近代社会的な価値観を相対化するために自治があるんですよね。そこから人間を開放するというか。学習によって人が新陳代謝しながら変わっていくためには、画一的なやりかたではなく、自発性が大切です。自発性が失われないようにすることに、社会教育の一つの大きな目的があると思うんです。



社会教育と文化芸術

森本：博物館などでもいわゆる展示だけじゃないことを求められてはいますが、地域づくりや環境など社会的課題に結びつけて、施設内にとどまらない展示をしましょう、それを通じて地域で、歴史や文化を伝えていきましょう、という動きになっているように感じます。言ってみれば、文字の文化なんですよ。舞台芸術のような非文字の文化について、学びの着目は少ないように感じます。

小川：社会教育に限らず、徹底的に身体は外して考えられているのかもしれないですね。

森本：いろんな学問のコラボレーションを社会教育でもしていかななくてはいけない。教育学者の大田堯^{たかし}さんは、文化芸術に通じる言葉をたくさん持っていらっしゃいました。社会教育にとどまらない、教育学にもとどまらない、民俗学や科学、生命学にも橋渡しした研究者です。一番印象的な言葉は、「ちがう・かかわる・わかる」です。ひとりひとり、人間は違って、人間同士関わりながら変わっていく。すごくシンプルに人間が生きることの根源を表現していると思います。これが学習、学ぶということの根源ではないでしょうか。「ちがう・かかわる・わかる」は、文化芸術とすごく関わると思うんですよね。

プロフィール

森本扶（もりもと・たすく）

『子ども白書』（日本子どもを守る会）編集委員長。1976年生まれ。埼玉大学・都留文科大学・法政大学ほかで非常勤講師（社会教育学）。子育てを支える中間集団づくりのための学習活動について研究。主著に『地域学習の創造』（共著／東京大学出版会／2015年）、『蠢動する子ども・若者』（共著／本の泉社／2015年）ほか。

編集：小川智紀、田中真実、高荷春菜、川村美紗（STスポット横浜）

写真：井上亮（P4-5）、山内康平（P6-7）

デザイン：白井愛咲

テキスト：北沢理美、丹羽梓

印刷：共進印刷株式会社

発行：認定NPO法人STスポット横浜

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階

発行日：2022年12月28日

本事業についてお問い合わせ：

認定NPO法人 STスポット横浜 地域連携事業部

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階

TEL：045-325-0410 FAX：045-325-0414 MAIL：community@stspot.jp

<https://www.stspot.jp> 認定NPO法人 STスポット横浜

The background features a light gray field with white wavy lines. A white rectangular box is centered horizontally, containing the text 'STSpot' in a large, bold, black sans-serif font, with 'Yokohama' in a smaller font below it. Two bright yellow geometric shapes, one on the right and one on the left, partially overlap the white box. The bottom half of the page is a light gray grid pattern, with a white curved shape at the very bottom.

STSpot
Yokohama